

ガンダムビルドファイ ターズ バトルフィー ルド

運命の女神 ノルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イオリセイさんが世界大会で優勝してから3年。

いつか戦いたい、負けてもいい。

そんな闘争心を持つ少年の話

目次

グラハム・エーカーに惹かれた男

1

朝一バトル

—————

7

演習！練習？本番!?

—————

13

永遠の蒼

—————

24

永乃さん 走る

—————

40

永乃さん、ツツコム

—————

55

グラハム・エーカーに惹かれた男

何だろうか、やけにぼんやりした記憶だ。

『これは避けるよ!!』

この声は毎日のように聞いている。

紅いビームが3発

コントロールパネルを操作し、出来るだけ最小限の動きで回避する。

記憶がはつきりしてきた、これは二年前の兄貴とのバトルだ。

『よし、よし、じゃー次はこれだ』

兄貴の機体は小型のビットを6機飛ばし、俺のオーバーフラッグを囲むように動いていた。

何とか取り付かれないように変形をし、加速する。

それでも兄貴のビットはこちらを捉え、テンポよくビームを放つ。

『回避してるだけじゃ俺は捉えられないぞー』

そんなことはわかってる、だが迎撃しようにもビットは高速移動を繰り返しながら撃ってくる。

ビットに意識を集中していると接近警報が鳴り響く。

『あーらよつと!!』

兄貴の紫にカラーリングされたスローネットワークアイがバレルロールを繰り返しながら接近。

オーバーフラッグの左翼が切られ、コントロール不能状態に陥った。

すぐさま変形を解除するがその隙を兄貴は見逃さず。

ビットが次々OBフラッグに襲いかかる。

『終わり』

6機のビットは右腕、左足、右足、左腕、胴体、最後にメインカメラに刺さり。

『pppppppppppppppppppppp』

目が覚めた。

.....

「夢か...」

偉く懐かしい夢だ、何年前だったか。

そんなことを考えながらリビングへ向かう。

今日も母親は朝ご飯を作り置きし、仕事へ向かっていた。

朝飯はいつも通り、パンと目玉焼き、そしてコーヒーだ。

テレビをつけ、朝飯にありつく。

いつもの朝のニュースを見る。何でも近々新しいガンプラが発売するらしい。

携帯を確認すると兄貴から『予約しておいた。』と、このニュースを見ていること前提

でメールが来ていた。

恐らくあいつは前々から知っていたのだろう。

この辺の情報は先取り競走をする。

何故か兄貴は情報先取り競走で負けると悔しがる。

ガキみたいだ。

「機体の名前は？」と返信しておいて、俺は朝飯を片付ける。

服を制服に着替え、携帯をチェックする。

『RX 80PR ペイルライダー 軽装備』

………確かプレバンだった気が

『ツテで頼んだ』

なんでこっちの気持ち分かってるんだよ。

そうこうしている間に、家を出る時間となった。

家を出て学校に向かうとしよう。

相澤 龍と俺の名前の入ったウエストポーチを片手に玄関を出た。

俺の通っている私立アクシズ高校には特殊な校則がある。

一つ ガンプラバトルをするものはガンプラを持参すべし。

2つ ガンプラバトルを申し込まれたものはガンプラバトルを教師立会の元、公平にバトルすべし。

3つ 負けたものは1週間の居残りとする。

以上、アクシズ高校校長より。

よくわからん。

そしてこの校則のせいなのか、いくつかの強力な団体が完成していた。

ガンプラバトル部 その名の通り、武闘派の1団 ガンプラバトルの腕は学園トップクラスになっている。

ガンプラ作成部 まあ、こちらもその名の通り、ガンプラを改造、または極限まで劇中再現を試みる部活。ただバトルをする為にガンプラを作った訳では無いと、言わば音信派。

そして女子ガン普拉バトル部

こちらは男子の量だけで部室をいくつも使うことになるということから男子女子にわけられた部活。

女の子とはいえ、腕前はかなりある。

と、この様な事になっている。

なぜ今これを思い出しているかといえば。

「来たな!!相澤 龍!!!」

「今日はバトルだ!!!」

「1週間の居残り…それすら乗り越えて俺達は挑みに来るぞ!!」

……先週、俺にバトルを申込み、全敗した3人のガン普拉バトル部の部長 副部長

そしてリーダーと呼ばれる3人組が待ち構えていたからだ。

「……申し込まれたからには逃げられない…が教師は？」

リーダーが指を鳴らすと後ろからぐるぐるに縛られたクラス担任の西崎女史が男子生徒につれて来られていた。

……

「助けてえ〜相澤くうん〜」

「さつき転んで頭を打ったところを捕まえた、安心しろ、手当はした」

いや、そういう事じゃない

「はあ…わかった、体育館でいいですよね」

さっさと終わらせて朝のホームルームをして寝たい。

「ああ！今日こそは勝たせてもらおうぞ!!」

朝から元気な先輩方だ。

初めてのSSなのでお手柔らかにお願いします。時系列的にはセイくん優勝から二、三年後をイメージして作っています。

主人公が使うガンプラはほぼライバル機や量産機でやっていきます。

朝一バトル

『Please Set Your GPBase』

GPベースをセットし、いつもの機械音が鳴る。

『Please Set Your GUNPLA』

サイドポーチからブレイブ指揮官型を取り出し、円盤状の中心に置く。

『Space』

宇宙ステージか。しかもデブリ帯が多い木星近くの中域だ。

周りがプラススキー粒子によって固められる。球状のコントロールパネルを握り。

俺はなりきる。

「ブレイブ！相澤 龍！出させていただく!!」

俺のブレイブが発進する。今回の敵はリーダーだけだった。

前回は確かサンダーボルト版のフルアーマーガンダムだったか。

変形をし、索敵を始める。

変形状態を維持しながらデブリ帯を進む。

いつもならステージの中心あたりで戦闘が始まるのだが…

『落ちろお!!』

左側面からの狙撃、変形解除をマニューバ込みで行い、回避する。

狙撃を行ったポイントにトライパニッシャーを撃ち込む。

どうやらガードされたようだ、こちらはまだ捕捉できていないが方向は把握した。変形をし、旋回しながらそのポイントへ向かう。

捕捉した。

どうやら今回はシールドを二枚増やしたフルアーマーガンダムのようなだ。

『これがフルシールドガンダムだ!!』

右の2番目のシールドが焼け焦げている。

恐らくトライパニッシャーをガードしたシールドだろう。

そしてさっきの狙撃はどうやらビックガンによる射撃のようだ。

と言っても、大型ビーム砲をビックガンに取り替えただけの機体のようだが。

周りを旋回しながら観察をしていると、あちらに機動性はなく、ビックガンをこちらに向けるだけで精一杯の旋回力のようだ。

……フルアーマーガンダムの旋回能力と機動性を見事に失わせてる。

その為にシールドを増量したのだろうか……

コントローलパネルを操作し、変形を解除する。

ドレイクハウリングで牽制をし、二連装ビームライフルを封じる。

シールドの隙間からミサイルランチャーを発射するが、ブレイブの旋回力、そしてこのデブリ帯で、その威力を発揮することはない。

チマチマ相手の玉を使わせるだけの試合となってしまった。

コントロールパネルからGNサーベルを選択。

一気に敵に接近しシールドごとビックガンを両断。

『くっ、離脱する！』

バックブリストでビックガンの誘爆に巻き込まれないよう回避する。

すかさずサーベルを投げ、回避ポイントを減らす。

だがシールドを全面に展開し、弾く気でない。

その防ぎ方はナンセンスだな！

ドレイクハウリングを胴体と接続させトライパニッシャーを放つ。

『pppppppppppp』

シールド5枚のフルアーマーガンダムはトライパニッシャーをガードしながらフルブリストで突っ込んできた。

『なめるなあ！』

先輩方が叫びながら突っ込んでくる。

近づくにつれシールドが焼けとけ、ガードしきれない箇所が増えていく。右腕、そして左足が爆発を起こす。

リアアーマーにマウントしているシラヌイを引き抜き、ドレイクハウリングを捨てる。

『終わりだア!!!』

残った左腕でサーベルを握り斬りかかって来るが…

左の操作パネルで『GNフィールド』を選択

ビームサーベルは弾かれ、隙だらけの胴体にシラヌイを突き刺した。

『GN…フィールド…?!』

『Battle END』

バトルが終わるとプラフスキー粒子は徐々に消えていき、バトルフィールドには無傷のガンプラが倒れていた。

「相澤…なんでその腕でガンプラバトル部に入ってくれない…」

「俺は自由にガンプラバトルがしたいんです、それに出来るだけ楽しみたいんですよ」
ガンプラバトルは楽しい、だが同時に俺の中ではトラウマでもある。

負けつつけていたトラウマが…

「それでも君腕がガンプラバトル部に欲しいよ…」

話していると横から西崎女史から

「ガン普拉バトル敗北者、武藤 直政は放課後補習と共にトイレ掃除」

「ええ！なんでトイレ掃除もなんですかあ?!」

「先生を拉致したからよ」

「あつ」

こうして朝8時半まで続いたガン普拉バトルは幕を閉じた。

我が1年4組は俺と小池以外ガン普拉バトル部員しかおらず、クラスに入ればまずバトル部へのオファー、もう梅雨も近い5月半ばだと言うのに飽きないのかこいつら。

「相変わらず人気者だな」

ゲラゲラ笑いながら前の席であぐらをかいてる奴がいる。

「…おはよう」

「おはよ、今朝の戦い見たよ、今回は相澤式グラハムスペシャルは見れなかったのが残念だった」

「誰がつけたんだよそれ」

「俺だよ！」

ほんと…こいつは…

「みんなー、席についてーホームルーム始めるよ」

頭に包帯を巻いた西崎女史も来たことだし

寝よう。

昼休みも特に何もなく。

放課後、今日は兄貴の店の手伝いの日だ。

ついでに小池を連れていくことにした。

演習！練習？本番!?

小池との帰り道、プラモ模型店ソレスタルへ向かうべく足を繰り出した。

「小池、制作してたインパルスはどうなる？」

「持ってきてるよ、コンセプトも固まってきたし」

俺と兄貴の手によって初心者ビルダーと化した小池はパーフェクトインパルスを頑張って作成中。

「よかったな、出来たらガンプラバトルの練習な」

「時々CPUと戦ってるけど難しいね、操縦には慣れたけど攻撃の当て方とか攻め方がいまいち」

まあ、最初はみんなそうだよな

俺も昔は反射だけで操縦してたからな。

「暇だったら少し付き合ってくれか？少しいじったBD2号機の試験をしたい」

「それはいいけど俺で相手になる？」

「攻め方とか射撃のコツも教えたいから大丈夫」

「いらつしやーい、今日は木曜日なので緑色のHGが安いよー」

店に入ると奥から兄貴の声が聞こえてくる

どうやらお客もいないらしく、作成室にいるようだ。

「兄貴ー、俺だ」

「こつち来てくれー今手が離せない」

これで客商売してると思うと苦情など来ないのだろうか。

作成室に入ると20代なのに白髪が多いいこげ茶色の肌をした守下 仁がいた。

どうやら1・5ガンダムの改修を行っているようだ

「兄貴、小池来てるぞ」

「んーああ、三日ぶりー」

こつちを見ることはなく、淡々と作業を繰り返す。

小池はペコと頭を下げ、バックを下ろしていた。

「なにやってんのさ」

「んーいやあさ、ケルデイルサーガを見てからセブンガンで1・5でできねえかなあつ

て」

「なるほど、武装は？」

「腕をリボガンに変えてトリプルドライブに変更ロングGNライフルを両手に、リアアーマーにGNピストル×2、消耗品としてGNバズーカを初期装備にする予定」

「外装はそのまま？」

「いや、顔面にマスク、全体的に角張つてるところを短く丸くする、足に関しては少しごつくする予定」

ケルデイルサーガってよりアストレアタイプFを思い出す。

「ふーん、それで今日暇？」

「朝に常連さんが来てから誰も来ない、暇すぎてパン焼いた」

「ならバトルシステム使っていいか？」

「いいよ、せっかくだし僕もやろっかな」

「小池に操縦教えるんだよ、店番してろ」

「はいはい、なら見学だけしてるよ」

話が一段落し、店内に待機していた小池を連れ、バトルルームに入る

「普通に教えながら戦うから通信はオープンな」

「緊迫してきたな…」

「慣れろ、手加減はしてやるから」

『Please Set Your GPBase』

いつ見ても、この粒子は綺麗だ。

『Please Set Your GUNPLA』

「ブルー、あいつに付き合っつてやってくれ」

『Woods』

「ブルーデイスティニー2号機改!出陣するぞ!」

『コアスプレンダー!出ます!』

コアスプレンダー出撃後、チエストフライヤー、レッグフライヤー、シルエットフライヤーが射出されコアスプレンダーが変形

レッグフライヤーとドッキングしチエストフライヤーとも合体。

シルエットフライヤーに装備されたフォースシルエットがインパルスと合体。

成型色が現れ、フォースインパルスとなった。

インパルスはSEED DESTINYという作品において初期主人公機として登場、一番の特徴は4機でドッキングしMS形態となる。

実際はユニウス条約によりMSの保有数が決まっていたため、それ誤魔化すために分離機構を有している。

フォースは機動力が高く大気圏内ですら飛行能力を有する。

装備はビームサーベル、高エネルギービームライフル、バルカン、M71-AAA
フォールディングレイザー対装甲ナイフ

と、オーソドックスな装備となる。

「わざわざコアスプレッダー状態から出撃する所、こだわってるね」

『あのシーンのワクワクは忘れられないよ』

「ああ、そうだな」

こちらのブルーデイスティニー2号機はBLUE Destinyの世界に登場する。後期ライバル機

本来の武装にヒートサーベルを2本装備させ、リアアーマーにスラスターを増設した。

いわばブルーデイスティニー2号機改

「よし、ホバー走行可能 武装確認」

盾に装備されたヒートサーベルを手に持ち、間合いの確認。

……充分な間合いだ。

正にジオンの騎士にふさわしい機体だ。

『で、俺は何をすればいい?』

『本気で龍に挑めばいいと思うよ』

ギャラリーと化した兄貴からの助言。

実際一番手っ取り早い。

ガンプラバトルは実戦が一番成長する。

俺がそうだ。

「兄貴の言う通り、そうしよう」

ヒートサーベルをマウントし直し、空に浮くインパルスを眺める。

『わかった、壊しても文句言うなよ』

「負けたらガンプラ一個買ってやるよ」

『じゃ、お二人さん Battle Start!』

ビームライフルと胸部バルカンを同時に打ち、相手を地面へと近づける。

『いきなり撃つてくんない!』

スロットを捻り、ビームサーベルを選択。

右手にビームサーベルを握り

スラストアーを大きく吹かし、上からたたき落とすように切りかかる。
流石のインパルス、持ち前の機動力を活かし左に回避を行う。

「逃がすか！」

左手のビームライフルのトリガーを3回引く。

『くっ』

「!?」

レッグフライヤーとチェストフライヤーが分離し、ビームを回避
チェストフライヤー状態から放たれたビームライフルを防御した。

「貴様はシン・アスカか！」

『俺は出来ることをやってるだけですよ！』

1度地上へ着地し、再度飛び上がる。

「ドッキングするスキは与えん！」

『はああ！』

落下中だったレッグフライヤーがブルーへ蹴りを入れる。

「……」

初心者動きとは思えない操作、

まだまだ攻め方が分かっていないが防衛、保身に長けた動き

そしてガンブラということ生かした戦い方。

「兄貴になんか教えられたか」

『え?確かに前に相手してもらった時に色々アドバイスは貰ったけど?』

あー、だからか

「兄貴、小池に攻め方を教えなかった理由は?」

『彼には攻めるより守りの方がいいと思ってるね、ある意味才能だよこれは』

それは俺も感じていた、いくらアドバイスをもらったからと言ってこれ程やりにくい相手になるとは。

『後は龍とのコンビを組ませた時にいい傾向になると思ってるね、いつまでも1人で戦う訳にも行かないでしょ?』

「俺は独りじゃない、ブレイブがいる」

『相澤は本当にブレイブ馬鹿だなあ』

『龍の相棒だからね、それでもファイターなら仲間を大切に』

兄貴の言葉に重みを感じ、そして兄貴に入学当時話した事を思い出す。『俺はこの学校の制度を変えたい、いがみ合うようなバトルじゃない、心から楽しめるバトルに』

再び小池のインパルスを眺める。

荒削りながらも愛が詰まった機体。

何より、小池は小学校からの友人だ。

あのめんどくさい勧誘に付き合わせるのには悪いと思っていた。

『相澤、気にする事はないぜ どうせ俺も勧誘されてる身だしな』

……はあ、俺ってそんなにわかりやすいか？

「そんなこと言う暇があるなら練習しろって言いたいけど、正直助かる」

『僕もできるだけ協力するよ、兄貴としてね』

『助かります』

「要らないとか言っちゃダメか？」

『言ったらあつちの味方してやる』

「頼むから辞めてくれ」

小池が笑い俺も兄貴も釣られて笑い出す。

このバトルが終わったらブレイブに新武装を追加するか。

少しいいアイデアが思いついた。

『で？このバトルはどうする？』

「再開するか、兄貴のせいでそれちったよ」

『僕のせいかい?なら少し助け舟でも出してあげよう』

は?

そう言うのと兄貴はGPBaseをセットし、先程の1.5を筐体へと置いた。

は?

「あ、兄貴?」

『守下さんが相手してくれるんですか?!』

『未完成だけドトリプルドライブに慣れたいからね、丁度いい』

「え?ちよつと待って、本気で言ってる?」

『大丈夫、本気は出さないよ 出した時は龍ならわかるでしょ?ただそっちは本気出来

てね』

「ほんと…やめてくれよ…」

『前から気になってたけどなんで守下さんとバトルするの嫌がるの?』

「10年間、一度も勝ったことがないんだよ、しかもあいつは元アクシズ高校生徒会会

長」

アクシズ高校生徒会長はいわば学園最強を意味する。

最強伝説を3年間守り続けた男。

使われた機体はアルケーを回収した機体。

アルケミストガンダム。

戦場の錬金術師とまで呼ばれた。

『錬金して出たものなんてバラバラのパーツだけだけどね、さあ、僕が出撃したらそれが
合図だよ1. 5だけにね』

さっむ

『守下！1. 5リヴアイブ！行く！』

永遠の蒼

『守下！1. 5リヴァイブ！行く！』

フィールドの端から、継ぎ接ぎだらけの1. 5がこちらへ向かってくる。

「小池は前で牽制、俺はスキを伺う、プランbって作戦で」

『了解、そのプランbって小学生の缶けりいらいか？』

ガンプラバトルにおいて、タッグ戦に重要なのは役割分担だと俺は思う。

小池の回避能力、そしてあの動体視力。

どちらが前に出るべきかは一目瞭然だろう。

『射程範囲内に捉えた、牽制する！』

インパルスが高エネルギービームライフルを連射する。

正に当てるのが目的ではなく相手に回避、防御を用いる攻撃。

「なるべく地面へ近づけるようにしてくれ！」

兄貴の1. 5は微動だにもしなかった、ただただ真っ直ぐ、こちらへ迫る。

右手でコントロールパネルを操作し、ビームサーベルを選択。

スラスターを全開にし、正面から仕掛ける。

「相手がトランザムする前にキメる！」

EXAMSystem。stand-by。

BDのツインアイが緑から赤へ切り替わり、スラスターから発せられた炎が白から赤へと変色していった。

EXAMは機体性能を格段に上げるがSystem終了後、各関節部に多大なるダメージを追う。ものはこの剣と言う言葉が一番合うSystemだ。

『上と下から追い込む！』

上昇と迎撃を同時に行い、1・5の視線がインパルスを捉えるように行動する。

『シールドファンク』

リアアーマーから飛び出たそれは小池の攻撃を1つ1つガードしていく。

俺のBDは1・5へ向け飛翔し、突き刺す構えを取った。

(今の兄貴なら…)

『……』

真下からの突きに対し、1・5はこちら側を向こうともしない。

(…?!)

機体が紅く輝き、瞬時に回避し右腕を掴まれる。

(やばい！)

右腕を掴まれたまま、メインカメラにかかと落としが入る。

ギイーンとフレームが歪むような音が聞こえてくる。

兄貴の1・5はかかと落としをした足を振り上げ、腹部にヤクザキックを食らわせる。

ポキッ…

(嫌な音が聞こえた)

右腕が肩の関節ごと外れ、地面へたたき落とされる。

『相澤あ！』

「兄貴に近づくな！」

地面スレスレでスラストを全開にし、損傷を最小限へ抑える。

(だから嫌なんだ、兄貴とのバトルは…)

自分が楽しいプレイ、それだけを求めたあいつの戦い方。それはどれだけのファイターを傷つけたのか。

考えたくもない。

『相澤が持ち機体じゃないにしても一方的にやられるって…』

「しかもあれ本気じゃねえ…本気なら最初の一撃で終わってた」

1. 5はBD2の腕を投げ捨て、こちらに目をやる。
『終わり?』

癪に障る。

「小池、バトルは経験とは言ったけど経験以前の問題だ、今回は終わりにしよう」
『え?!まだ俺満足して』

「いいから!」

いつもにもなく、叫んでしまった。

『…わかったよ』

「兄貴、リタイアだ」

『了解』

『Battle Ended』

「ふう〜久しぶりにバトルしたけどやっぱり楽しいね〜」

苦しめられる相手の身になれ

「兄貴の自己中バトルには苦しめられるよ」

「僕が楽しければそれでいい、相手がどうなろうと」

「ええー、俺は不完全燃焼なんすけど」

「辞めとけ、初心者とその他に1にトランザム使うような大人気ないやつだ」

ガンプラがいくつあっても足りない。と言いたげだ。

「そんな事言わないでよ」

チャリンチャリン

「いらつしやいませ！木曜日には緑の機体が安いよ！」

すかさず営業スマイルに戻り、入口へ向かう。

「ほんと変わってるな、お前の兄貴」

「コロコロ態度変えすぎなんだよね」

一応手伝い中なのでエプロンを付け、お客様の元へ向かう。

お客様はどうやら小学3・4年生と言った所の幼女だった。

兄貴1人で事足りると思いきや、入口からベルがなり、客がもう1人入店したようだ

「兄貴、俺こっち接客するからもう片方を」

「ん、了解」

防止を深くかぶっているので顔は見えないが

ピンク色の可愛い財布を握りしめ、H G U C 「ザクⅡF2型」を眺めていた

「お客様、どんなプラモデルをお探して？」

「……あ、あのう……」

どうやら照れているようだ。

ガンブラが世界レベルで注目される中、やはり女性のビルダーやファイターは少なく、ここまで小さい少女となると、やはり照れくさいようだ。

1度屈み、目線を合わせると頬を赤く染め、軽く涙目が伺えた。

「大丈夫ですよ、欲しいプラモデルがあるのでしたらこちらで用意するので」

「ああ！君は先程の幼…少女ではないか！」

後から大きな声で主張する主は誰じゃ。

後ろを振り向くと、目の周り全体が隠れるようなサングラス、クワトロ大尉か

あからさまに怪しいマスク。暖かくなってきた時期だというのにコートを羽織り、蒼いハットを被り、右手を腰に、左手を口に置いた謎のお兄さんがつつたていた。

「お客様、他のお客様のご迷惑になるのでお静かにお願いします」

「す、すまない」

「えーっと、この娘のお知り合いでしょうか？」

「いや、私は先程この娘がガンブラバトルを行っていたのを見ただけだ、あちら側に認識はなければ面識すらない」

先程から少女を見る目が恐ろしい、今にもこの店のガンブラを買い占め、その全てのガンブラを渡さんとばかりの目だ。

「なるほど、お客様、お名前を押しして頂けますか？」

「私か？私の名は永乃　蒼！通り名は蒼き撃墜王だ！」

さつきつから思ってたけど、少し痛々しいな。

……ん？

「蒼き撃墜王ってあの隣町で騒がれてる……？」

「その蒼き撃墜王かはわからんが隣町からは来ている！」

ええ……確か1対50を30分で全て撃墜し、無傷だったと言う伝説がある人が……

「こんな人だったのか……」

「あ、あのう……ごめんなさい……」

「……あ、申し訳ありません　お探しのプラモが見つかりましたか？」

「い、いえ……この子を直して欲しくて……」

財布の裏に隠れて見えなかったが、どうやらAGEEー1ノーマルを、素組みしたガンプラのようだ。

………左腕の肘と右足の付け根が折れていて、よく見るとVアンテナも欠けていた。

「……これはガンプラバトルをしたんだね？」

永乃さんが少女の隣に座り込み、AGEEー1を眺めてそう言う。

「は、はい……」

普通、落とした結果こうなる事が多いが、ガンプラバトルという事を一発で言い当て、優しい笑みを浮かべながらAGEEーを撫でる。

「いいガンプラだ、思いが詰まってる 少し借りてもいいかな？直せるかもしれない」

「……？」

少女がこちらを伺う

「大丈夫ですよ、このお兄さんはガンプラ作るの上手い人らしいから」

いくつかの作品をネットで見た事がある。

それはビルダーとしての遊び子を忘れず、ファイターとしても一級品とまで扱われたガンプラだ。

信頼もあつい。

「作成室を貸して頂けますか？店長」

「大丈夫だよ、AGEEーの関節パーツは置いておいたから」

「少女よ、名前を教えてくださいただけるかな？」

「……今野……咲です」

「いい名前だ、可憐な印象を受ける」

「一応監視役で僕も作成室入るから店番よろしく」

別れ際、兄貴から「彼はロリコン紳士なんだ、少女が悲しんでたら手を差し伸べずに

「いられない人なんだよ」と告げられ、反応に普通に困った。

「はあ、小池くバーフェクトパツクのアイディア足りてる?」

手持ち無沙汰になった俺は、小池の元へ向かい、パーフェクトパツクについて案を出していた。

1時間後

「やけに長いなって思ったら塗装までしてたのね」

アイディアを話尽くし、またもや手持ち無沙汰になった俺は作成室内へ入った所、パーツを分別され、紅とピンクで塗装されたAGE-1と何処と無くドツズライフルに似たアサルトライフルがパーツのすぐ横に置いてあった。

「僕が乾くまで管理するから、乾いたら家まで配達するよ」

「その時は私も同行し…いや、私にはやることがあるのだった」

「例のアレかな?僕も話は聞いたけど介入する気にはなれないなあ」

「私も介入する気は毛頭ない、ただタチの悪い噂がガンプラに影響するのも事実だ」

何の話だ?

「見て見て!私のガンダム!可愛い色になったよ!」

「ああ、可愛いカラーリングですね」

素直に笑顔を向け、帽子越しの咲ちゃんの頭を撫でる。

「でしよでしよー！」

先程までの涙目とはうってかわり、笑顔が澆刺とした、元気のいい少女となり
AGEー1のように見違えたように見えた。

（懐かしい、俺もオーバーフラッグを初めて塗装した時、こんな感じだったっけ）

「気になっていましたけど、このライフルは？」

「ああ！それは私が自作したスーパードツズライフルだよ」

…ええ？

「今ここで…ですか？」

「このくらいならしよっちゅうやっている、寧ろシリンダーを作っているビルダーに比べたら楽な方だろう」

…やはり只者ではないようだ。

「触つても？」

「それはもう私では無い、咲ちゃんに聞くと良い」

目線を咲ちゃんへ向ける。

「い、いよー！」

まだ塗装がされていないため、プラ板やマスキングで仮止めされているがツインドツ

ズキャノンを主体にバレルを短くし、スコープ、フォアグリップを取り付け取り扱いの良さそうな武器になっている。

「下手にフルモードの様なパワー変更がない方がいいと思つてね、フルオートとセミオートを変えられる設定：として扱いやすくなつてはいるはずだ」

これがビルダーとしての蒼い撃墜王：

溢れるアイディア、そしてそれを現実にする知識と経験。

いつか戦いたい、が今の俺では勝てないであろう。

「あー：そういうえば私は用があるのだつた！店長！：また来る！：ではさらばだ！」

凄いスピードでニッパやヤスリ等の道具をバックに詰め、一瞬にして店内から出ていった。

「ありがとうございまして！また起こし下さいませ〜」

時計を見るともう6時を回っていた。

このまま咲ちゃんを一人で帰すわけにも行かないし、一緒に帰るか

「えーつと咲ちゃん、もう夜になるし送つていこうか？」

「え？でもお兄ちゃんに迷惑かかるから…」

「すげえ今時の子にしては人間出来てる。兄貴より出来てる。」

「ふああああ、眠い」

「大丈夫だよ、それよりも2日くらいAGE―1と離れ離れだけど大丈夫？」

「うん！おじさん達がちゃんと預かっておくって！」

「おじさんつてく僕まだ20だよ」

「じゃ、兄貴、咲ちゃん送っていくから先帰るよ」

あいつと欠伸を書きながら適当に返事をした兄貴はレジの横に座り、コーヒ―を飲んで
いた。

「小池、帰るぞ」

「おう、こっちは準備できてるぞ」

「じゃ、行こっか咲ちゃん」

「うん！またね！おじさん！」

「またのお越しを」

「道はどつち？」

「こつち！」

左を指さし、道路側を歩き真ん中に咲ちゃん、その横に小池という陣営になった。

注 横歩きはやめましょう

「そういえばその少女は？」

「ああ、この娘は今野 咲ちゃん、うちのお客様だよ」

「ふーん、よろしくな、咲ちゃん」

「よろしく！おにーちゃん！」

「あ、俺の名前言ってなかった」

「名乗り忘れってるなら俺が紹介しよう、そこにいるお兄ちゃんの名前は相澤 龍、通称マスターシドウ 俺は普通の小池 克人」

「…？マスターシドウ？」

「こいつが勝手に付けただけだ、普通に龍でいいよ」

「龍兄ちゃんに克人兄ちゃん！えへへ…」

「……この娘は兄弟がいないのだろうか、先程から兄ちゃんと主張が激しい。

「咲ちゃんは兄弟とかいるのかな」

「んーん！いない、一人っ子なんだー、だから今お兄ちゃんみたいなのができたから嬉しいー！」

永乃 さんが聞いたら喜びのあまり叫びそうだ

「……小池は確か妹がいたな」

「え？ああ一応な」

歳をとるにつれて、仲が悪くなってきたと前に聞いたが、まだ仲が悪いままのようだ。

「いいなー、寂しくなさそう！」

「1人の方が気楽だよ、妹なんてうるさいだけ……」

「……そんな事ないと私は思うよ、いつも1人だと色々考えちゃうもん……」
(え?!)

咲ちゃんの表情が一転する。まるで最初会った時の様な表情が伺える。

まずい事になった。

この歳で少女を泣かせる訳には行かない。

「確かに妹がいなかったら寂しかったかもしれない、喧嘩する相手がいなくてのは少し、いや、かなりさみしいわ」

「今の録音したから妹に聞かせる」

「お前エー！ふざけるな!!」

「ぷっふっふっふっふ……」

よし、どうやら笑ってくれたようだ。

しばらく話しながら歩いている内、咲ちゃんの家が見えてきたらしい。

「あ、家だよー！」

『ええ……』

小池と声ハモる。何故なら。

「お嬢！よくぞ無事で！」

「ああん?! テメエらうちのお嬢になんもしてへんやろうなお！」

極道の家だった。

「お兄ちゃん達にひどい事言わないで！私のガンブラを褒めてくれた人だよ！」

「へ、へい！」

「すんまへん…お嬢」

すげえ、極道のおつさんを一言で収めた…

「じゃ、じゃ俺達はこの辺で」

「咲ちゃん、ガンブラは必ず届けるから、家に心配かけないようにね」

「うん！またねー!!」

咲ちゃんはいいけど家の人とは会いたくない。

「すげー家だったな」

「ああ、全くだ」

素直であんない娘が極道の娘って…

ああ、こんなマンガ昔読んだな。

その後、特に会話はなく分かれ道まで来たところで

「じゃ、相澤また明日」

「おう、また明日な」

ハイタッチを交わし、家へと向かった。

永乃さん 走る

小池と別れてから30分で家にはつき、風呂に入り、作り置きのお飯を食べる。

母親はまた仕事へ向かったようだ。

兄貴に連絡を取ってみたいところ、一言

『明日また蒼さんくるから、一緒に咲ちゃん迎えに行つてあげて』

『了解』

(咲ちゃんは純粋にガンブラが好きで安心した。俺もあんな頃あったなあ。)

食器を台所で洗い終わり、部屋に戻るためにドアを開けると目の前の机の上でブレイ

ブが仁王立ち態勢でこちらを見てくる。

「悪いな、今日は留守を任せてしまつて」

ブレイブは答えない、ただ少しすねているようにも見えた。

「怒るなよ、イケメンが廢るぞ」

部屋の電気をつけるとメインカメラに入った傷が鈍く光り、目に入る。

「わかつたよ、明日は連れてつてやるから」

分かってくれたのか、目に入った光は消えた。

「じゃ、寝る前に少し改造を施そう」

いいアイディアが思いついた。

何となく、兄貴のアルケミストガンダムを思い出すが、腹立つので考えるのをやめた。

「よし、出来た」

後は他パーツと武装を考えて、実行に移そう。

今日は素体の処理とちよつとした改造だけで充分。

時計を見ると一時を回っていた。

「……寝よう、おやすみブレイブ」

電気を消し、ベッドに入る。

ふとブレイブを見ると窓ガラスから入る月光で美しく見えた。

月光に

ブレイブ映えて

春の夜

……我ながらくだらない俳句だった。

いつものペースで朝支度を済ませ、学校に向かう。

今日は朝から小池のお迎えがあり、お前が学校でやりたいことつてのを聞きに来たらしい。

「で？そのやりたいことつてなんなん」

「焦るな、理由を話さないと多分理解できないから」

「へいへい」

「まず、あの学校に違和感を感じたことはないか？」

「は？ガン普拉バトル以外に関しては特に…？」

「それだよ、ガン普拉バトルに左右された学園、それがアクシズ高校だ、その中でガン普拉バトルはどう浸透してる？」

「競い合つて、どこが強いか、誰が強いか、みんな躍起になってるよな」

そう、それがあのアクシズ高校だ。

バトルに勝つために卑怯な事までする奴まで現れ、ガン普拉バトルの本質を忘れていく。

「つまり？」

「楽しんでない?」

「そう言うことだ、バトル理由はなんであれ、ガンプラバトルの本質は遊びだ、遊びは楽しくやるものだろう?」

「言いたいことはわかるが、あんな状態のクラス、もとい学校を変えるなんて出来るのか」

俺達のクラスはそれほど仲の悪い奴らはいない、ただやはりバトル部とビルダー部には見えない壁がある、言わば上っ面も上っ面だ。

「出来るかはわからん、ただ1-2月に開催される学年対抗ガンプラバトル会までに学年だけでも変わってほしい」

「どうやって変えんだよ」

俺に考えつく学年を変える方法、最終的には学校全体を変える方法。

方法は2つ、片方は確実、もう片方は：

「それは、楽しめるバトルをする。だ」

.....

静寂のまま、俺達は学校についた。

校門ではフルシールド先輩（フルシールドガンダム使用者）が清掃を行っていた。

「箒の音が聞こえたら俺が来た合図だ」

無視した。

朝の授業が終わり、昼休みになったので俺と小池は食堂へと向かった。

『日替わり定食で』

『んでさー、今日も会長かつこよかったよね〜!』

『あの人はかつこいいって言うよりエレガントだよ!』

『お婆さん、人参いらないよ』

今日も今日とて賑わった食堂だ。

「で、相澤は何頼むんだ」

「なんだ、奢ってくれるのか」

「二色丼」

「俺もそれでいいや」

「ダメか、ダメなのか」

「お婆さん、二色丼2つ」

「あいよ、少し待っててね」

「ここの食堂うまいよな」

「ああ、家庭の味って感じ」

暖かい家庭の味に飢えた俺はこの食堂を気に入っている。
寧ろ母親の弁当よりありがたい。

五分もしないうちに暖かい二色丼がお盆の上に置かれる。

「はい、250円ね!」

「はい、500円」

ああ、この黄色の卵とこげ茶まで味を染み込ませたひき肉が放つ濃厚な香り。

「毎度ありがとうございます」

「おい、何ほうけてんだ」

味付けは謎が多いらしい、全部おばさんが朝早くから手作りしてるらしく噂だと開校
当時から使われている秘伝の醤油があるらしく、それを

「相澤の股間に向けてキックを放つまで後5秒だ」

「すまん、なんも聞いてなかった」

あれ?俺の分の金が払われてる

「ほら、行くぞで」

「あ、うん」

払ってくれたのか。

それよりも早く二色丼を食したい。

出口に一番近い席を獲得した俺と小池は向かい合う形で座り込み、無言で食事を始めていた。

「…あら、相澤君と小池君ではないですか」

後ろから呼ばれたので食べるのをやめ、振り向くと我がクラスの女帝的存在、天草天さんがお盆両手に立っていた。

「天草様が…！天草様が俺達に話しかけてきた?!」

小池うるさい

「珍しい、君が一人で行動するなんて」

いつも取り巻きを数人連れてる彼女には俺達のような一般男性は近付くことすらできなかつた。

「…私しも一人で居たい時があるのです、それよりも男性二人で静かにお昼を食べてる方が珍しいかと」

どキツイー発、悲しくなるからやめてくれ

「お、おい相澤！天草…様に!?!後で親衛隊から殴られるぞ!?!」

取り巻きのこと親衛隊扱いとは。

「まあ、これも何かの運命…と言ったところでしょうか」

そういうと彼女は徐ろに俺の隣に座り、お盆の上のうどんを食べ始めた。

「…何故ここで食べる」

「あら、いけません？」

「別にいけなくはねえけどよ、俺達これから大切なお話があるんですよね」

「お構いなく」

…なんなんだ

「じゃ、小池 今朝の続きだ」

「考えたけどよ、そんな戦いどうやってするんだ？」

「えっと、ぶつちやければ精神論、あと総力戦？」

「は？」

「例えばなんだが、みんなが熱く、闘争心を燃やして、純粹にこいつに勝ちたいと思うようになればいいと思うんだ」

「こいつに勝てば部活内の評価は上がるとか勝つことに固執し過ぎる概念をとっばらいたい。」

純粹に楽しめるように。

「勝ちたいなんて誰でも思ってると思う、ただこの学校の生徒はみんな評価ばかり気にしてる」

「それが嫌だからみんなに楽しんでもらえるバトルをするって？」

「ああ、動機はこの生徒とバトルしても全然楽しくないからだ」

「どいつもこいつも周りの意見や評価ばかり気にして楽しいって感情が伝わってこない。」

あんなに楽しいバトルが一気に冷める。

「なるほど…でもどうすんだよ」

精神論だけじゃ何も始まらないぞと小池の目が訴える。

「俺が相手をリスペクトするバトルをすればいい」

「なるほど…じゃねえーよ！それをどうやって聞いてんだ！」

「いいから、これも口で説明なんか出来るか」

バトルすればわかるとしか説明ができなかった。

「ごちそうさまでした、面白い話でしたよ、でわまた…」

唐突に来た天草さんは唐突に去っていった。

何考えてんだあの入

「…相澤、天草さんと知り合い？」

「入学バトルの時、第1予選で戦って勝った、それだけ」

「……?!お前ほんと謎に強いよな」

なぜ天草さんがここまで評価されているかと言えば、学園内女子バトルランキング2

位であり、才色兼備、ぶっちゃけモデルやっててもおかしくないスタイル。

そりゃ、人気もでるわな。

「俺らもさつさと食べて教室戻るぞ」

「おう、もしもの時は流し込む」

残りの二色丼を平らげ、教室に戻る途中に箸の音がどこからともなく聞こえ、フルシールド先輩が部室の掃除を行っていた。

マジで聞こえたらいる合図だわ。

放課後、例のごとく勧誘をくぐり抜け、小池と共にソレスタルへ向かった。

「咲ちゃん迎えにいくんだっけ」

「ああ、乾燥室に置いたおかげで今日には組めるようになるらしい」

「咲ちゃんいい子だったよなあ」

小池には軽いロリコン疑惑がある。

前も迷子の女の子に対してまるで王子様のような態度で接していた。

「いい子だったな…ん？店の前に誰かいらないか？」

「え？」

店の前で腕を組み、この暖かい日差しの中

コートとブルーに入った蒼い帽子。

そしてあのサングラス。

「おーい、永乃さん」

こちらに気づいた永乃さんは駆け足でこちらに駆けつけ、少し焦っているように見えた。

「昨日の少年！大変なんだ！咲ちゃんが！」

「少し落ち着いてください、永乃さんがここにいるってことはまだ時間があるのでしよう？」

「あ、ああ！順を追って話そう……」

少し落ち着いてくれたようだ。

もし本当に咲ちゃんに何かあったらこの人は一番に駆けつけるはずだ。

「まずは、咲ちゃんがいじめにあつてゐる事が判明した。いじめは許される行為ではない事は君達にも分かるだろう、その上いじめの方法が汚い、ガン普拉バトルで1体4でバトルを強いられ、負けたら話してあげないなどの脅し文句」

……この人はどこからその情報を？

「子供だからといって許しておけない、ガン普拉バトルをいじめに使われるのもファクターとしてロリコン紳士として、叱る」

「そこまで聞いてて思ったのですが、なぜこの店に？」

「咲ちゃんからの頼みなんだ『私のAGE―1を取ってきてもらえないですか？』と、恐らくバトルする気なのだろう」

「なら走つて向かわれた方が…」

「君たちにも来て欲しい！私だけでは警察に突き出される！」

あつ

「…何となく…わかります…」

「え？この人は誰？」

「いいからゆくぞ！少年と以下略！」

「TRANS―AM！」

そこから15分ほど走った所、シヨッピングモールのバトル会場にて咲ちゃんと恐らくそのいじめている女子グループ、計5人がベンチで座っていた。

「咲ちゃん！君のガンプラを持ってきたよ！」

「あ！おじさん！お兄ちゃん！」

こちらに気づいた咲ちゃんは嬉しそうにこちらに駆け寄り、永乃さんが持つ、AGE―1を手渡された。

「後これを、名ずけてドツズアサルトライフル！そしてドツズサブマシンガン！」

胸のポケットから出てきた武器を手渡し。

彼女は友達の元へ向かう。

「ありがとうございます！」

お礼もあの子は忘れなかった。

どうやら本当に4対1でバトルを行うようだ。

……傍観者は嫌だな。

「咲ちゃん、俺だけでも参加出来ないか？」

「え？…聞いてみるけど…」

「相澤、流石に大人気くないか？」

「手心なら加えるさ、私ではなく彼女に勝利を捧げよう」

ふと、口から出たセリフはグラハムが言いそうなセリフ、あの人ならそういうだろう。

「龍兄ちゃん！1人だけならいいって」

「ありがと、では逝くでしょう」

二人を置いて幼女について行く姿はどんな姿なのだろうか。

そういえば永乃さんが何も言わなかったことに少し違和感、振り返ってみると永乃さんは顔を俯き何かを悲しんでいるように見えた。

やっぱり自分が戦いたかったのだろうか。
譲るべきだったか。

その頃、永乃の脳内

『幼女達よ、いじめは良くない、いじめるなら私を虐めるがよい!』

これでは引かれるだけか…

どういじめを辞めさせるべきか、平和な交渉など、ここだけの口約束になってしまおう、
いったいどうする?

生きてきた24年間で一番の難関だ、幼女達と話す口実、そして咲ちゃんへのいじめ
を辞めさせる方法…

やはりガンプラバトルしかない! 私にはそれしかない!

よし! 申し込んで

「永乃さん、何かを決めたところでごめんですがもうそれ相澤がやってます」

「へうま?!」

私はその場に座り込み、心から叫んだ。

「嘘だアアアアアアアア!」

その叫びは宛ら、親友に裏切られた時の叫びによく似ていた。

何を隠そう、そのいじめっ子のリーダー格が我が盟友の妹、小池 真由ちゃんだった。

「お兄…克人！なんでここに！」

「いや、シヨツピングモールのフードコートの真ん中に設置されたガンプラバトルシステムなんだから誰でも通るし、俺もやってるから…今日は咲ちゃんがいじめられてるって聞いて来たただけけど」

ウツと苦い顔を浮かべ、咲ちゃんを睨みつける小池妹。

「一応、咲ちゃんの名誉の為に言っておくが俺達は助けてくれともいじめを辞めさせてくれと頼まれてない、ただの俺達の自己満足に過ぎん」

「こいつの言う通りだ」

「ふ、ふーん で、この事を知った克人は私を叱る？それとも母に告げ口でもする？」

「するかばーか、ただいじめはやめてもらおうぞ」

「いじめ？咲が勝手に私達と仲良くなりたいうって言って、仲良くなりたかつたらバトルで勝たないとだめって言っただけよ」

……

呆れ返っていると小池が少しキレ気味に

「あ、そっか 咲ちゃん、こんなガキと遊ぶ必要は無いよ、もつと別の友達を探した方がいい」

「でも…まゆちゃんはクラスで一番ガンダムが好きって聞いて…仲良くなりたくて…」
(例え今戦って勝ったとして、恐らくいじめ、もしくははぶりは無くならない)

でもガンダムが好きって気持ち…か

好きなものを虐めに使っている自覚はあるのか? いや、重要なのはそこじゃないか。

「小池妹、ガンダムが好きという気持ちに嘘偽りはないな?」

「は?好きに決まってるじゃない、ただガンプラバトルはただの遊び、ゲームよ」
(やっぱりか)

こいつもガンプラバトルが楽しめてないんだな…

「わかった、なら小池妹と友人方、さっきの約束の通り バトルして勝った時はいじめとはぶり辞めてもらうぞ」

「お、おい相澤、お前もわかってるだろ」

わかってるさつきも考えてた。

「大丈夫だ、こいつらにもガンプラバトルの楽しさを教えてやる」

「ふーん、いいわよ?そこまで大口を叩くことは自信があるんでしようし?」

「ああ、期待してくれ」

「龍兄ちゃん?」

「咲ちゃん、もし負けてもこのバトル 楽しんでやろうな」

「うん！」

『Please Set Your GPBase』

三日ぶりの出撃だ、よろしくなブレイブ

『Please Set Your GUNPLA』

変形した状態でセットし、俺は…私は。

『Mars』

あの人に切り替わる。

これは…火星か…

「相澤 龍！出させていただく！」

『今野 咲！ガンダムAGEー1！でます！』

火星ステージは主に大きなデブリ帯があり、機動性を生かせられないステージとなつ

ている。

(だが、私のブレイブは！)

『咲！私の上に乗れ！』

『お、お兄ちゃん？』

咲は指示に従い、ブレイブの肩関節に捕まる、機体重量が上がリ、少し推進力が下がるが、こここのバトルフィールドは定期的に市大会が開かれ、30人がサバイバルバトルできるほどの大きさを誇る。

その中で相手の機体を探すのは至難の業だ。

ならばすることは一つ！

『捕まっっていうろ！ブレイブ！フルプラスト！』

デブリ帯の中で細かい軌道変更、マニューバを繰り返しフィールドの中央へまで向かう。

『わあああああああ！』

画面越しとは言え、かなりのスリルを味わえる。右へ左へ、上へ下へ。

デブリ位置を把握し、どう軌道修正を行えば最短で中央へ向かえるか。

反射だけでコントロールする。

「す、すごい……」

「……あの少年の操作技術はどこから来ているんだ？」

「あ、回復したんすね永乃さん」

「私の事はどうでもいい、あのデブリ帯を機体面積、機体重量、それらを全て考慮的確に回避する思考と反射、まるで超兵のアレルヤのようじゃないか」

「俺からしたらシヤアの真似をするグラハムにしか見えませんよ、あのガンプラを見ているとそうとしか……」

大型モニターには放出されたGN粒子が滑らかな曲線や角張った線を作りながら高速移動するブレイブが映る。

「そうだとしても、私のプルスツヴァイでもあそこまでの変態機動は無理だ、デブリ帯にメガ粒子砲を打ち込んでそのまま真っ直ぐ突っ切る方が早い、何より合理的でもある
ブレイブのトライパニッシャーならばそれも出来よう」

「多分、それはつまらないからだと思います、あいつは自分が楽しいと思つた事を続けたり、行動するんですよ」

「……………」

（つまらない……か……）

「モニター越しでもわかりますよ、あいつがどんな顔して操縦してるか」

どうせ満面の笑みだろ？と小池は最後に付け足した。

『きやあああああ！ぶーっ！つーっ！かーっ！るーっ！！！！』

「グラハムスペシャル！」

巨大なデブりに激突スレスレで変形を解除し、ハイパーマニューバで急停止を行う。

『ふえ?!ぶつかってない?!』

「私のブレイブならば当然だ、咲の機体に損傷は？」

『ないよ！凄い！あんなスピードだったのにどこもぶつけてない！』

「ならばよし、では索敵を始めるぞ、咲は背後の警戒を」

『うん！わかった！』

確実に相手より早く中心部へ到着した。

「ここならばどこから攻められようと逃げ道は作れる。

『そういえば龍兄ちゃんって左利きなの？』

(ん?)

「私は生まれつき左利きだ、ガンプラも全て左利き使用にしている」

『かっこいいね！』

「ありがとう、周りからは疎まれてばかりだがね」

そんな雑談をしているとリーダーに反応が出る。

「咲！」

『え？わあ！』

咲のAGE-1の前に入り、GNフィールドを選択。

粒子の膜が張られ黄色の巨大なビームから私達の機体を守る。

「この粒子量…長距離型か？」

『り、龍兄ちゃん！今の何?!』

「恐らく、あちらの先制攻撃だろう、こちらの場所がバレている…ということか」

『違くて！さつき咲達を守ったの！』

「ああ、それはツ」

またリーダーから反応があり、長距離射撃が的確に私達を狙う。

再度GNフィールドを形成し、状況を確認する。

「咲、1度先程の巨大なデブリまで戻る、付いてこい！」

『わかった！』

運が良かったのか3度目の射撃は無く、デブリの裏まで避難できた。

「…恐らく取り巻きの少女の二人による射撃、ビーム色と威力からハイパーメガ粒子砲

の可能性があるな……」

『あんな凄いビーム連続で撃てるのかな?』

「パワーリソース、言わば電池があればある程度の連射は可能だろう、だがあの威力となると1機分は使用されると考える」

『じゃ、今なら二人動けないって事?』

「その可能性が高い」

『今なら2対2で勝てる見込みがありそう!』

「安心しろ、私がいる限り負けはしないさ」

『うん!』

「では、奇襲を仕掛けよう」

『もう!何やってるのよ!いつもならあれで終わるのにやられないじゃない!』

『ええ、そう言われてもひかりの索敵ポイントはあつてたし……』

『私の射撃も外れた訳じゃない、あの威力を防ぐなんて…年の差つてやつ?』

『ひかりもりんもリチャージされるまで動けないよ、だからまゆとひつちゃん時間が稼

が……』

『……ひっちゃんはやめて…』

『わかったわよ、回復したら連絡して、行くわよひっちゃん』

『…だから…ひっちゃんは…』

「先程の射撃ポイントは把握してある、そこへは真っ直ぐ向かわず、少々迂回して後ろを取る」

『うん、わかったけど…私にやれるのかな…』

「なんだ？今更怖気付いたか？大丈夫だ、その機体と睽ならば…」

ブレイブのマニピュレーター（手）でAGEEー1の頭を軽く撫でて励ます。

昔兄貴にやられた時、意外と嬉しかった事のひとつだ。

『頑張る！頑張るよ！』

「そうだその意気だ、では掴まりたまえ」

変形をし、肩関節を掴み、ブレイブの足に絡まるように胴体を入れる。

『しゅっぱーっ！』

射撃ポイントまでの距離はそこまで遠くはなく、少し進むとレーダーに2つの反応。全く動きがないところを見るとこの2機は先程の長距離射撃を行った2機だろう。

(先に落としておくか? いや罠の可能性が高いか)

「藪を突く、咲 ドツズアサルトライフルでレーダーに映る2機を狙えるか?」

『うーん…初めて使うから当たるかはわからない…でもやってみる!』

「頑張れ」

AGEEーはリアアーマーに取り付けられたドツズアサルトライフルを両手で構え、慎重に銃身を調整する。

ドツズライフルの特徴は貫通力の高さである。

シールドで防いだ所がそのまま貫通するなんて話はよく聞く。

それに付け加えて連射式になったドツズアサルトライフル、蒼の撃墜王が作り上げた武器なのだから威力は抜群のはずだ。

『pppppppppppp』

(下からから接近警報?!)

「ハワード! ダリル!」

足の裏にセットされた強化サーベル（右　ハワード　左　ダリル）を展開し急接近する機体を迎え撃つ。

ハワードとダリルを交差する形で相手のサーベルを止め、機体を確認する。

「……この機体……ゼイドラの改造機か……？」

ゼイドラの成型色よりより紅く、ワインレッドの様なカラーリング、そして全体的に小さい装飾のような元を取り付けた外見。

『そう、これこそクイーンゼイドラよ！』

「この声……！」

「まさか……先程の小池妹とはな……アストレイやストライク系で来ると思えばまさかゼイドラとは……」

まさかこの少女……

「君はゼハードガレットが好きなのだな？」

『な?!なんでわかるのよ!』

「やはりか……乙女座の私にかかればこの程度容易くわかる」

『小池少年、本当なのか?』

『いいえ、双子座です』

「いい機体だ、その年齢でそこまで作り上げられたのもキャラクター愛というものか、そ

れともそれほどガン普拉が好きなのか」

『さつきつからぶつぶつと！』

「おそらくは後者だ！」

GNドライブの出力を上げ、力押しを図る。

『甘い！』

それに対し正面から強化サーベルを受け切る。

「なんと?! パワーで負けるか?! ならば！」

一度距離を離す直前に脚部GN魚雷を打ち込み、入れ違いざまに咲が前に出る。

ビームダガーを上段に構えたAGE-1はGN魚雷を躲したクイーンゼイドラに切

りかかる。

（あの距離の魚雷を交すか…いい腕だ！）

「咲！ここは頼んだ！もう1機を探す！」

『了解！』

変形しクイーンゼイドラの背後を通る。

『行かせるか！』

クイーンゼイドラの胸部がほのかにひかり

ビームバスターの態勢に入りこちらを向く。

『今は私を見て!』

そこに咲がドツズサブライフルで牽制し上手くカバーに入る。

『クツ! 邪魔ア!』

(恐らくもう1機も支援型と考えるのが妥当だ、前衛に1機に対し、それをカバーできるだけの支援…;そしてそのカバーに入る為の配置)

「私はそのデブリと見た!」

目の前に浮遊する丁度機体が1機分隠れる程のデブリにトライパニツシャーを撃ち込む。

威力を絞った為、貫通はしないものの微かにクレーターができ、レーダーを確認する。

「…そこではなかったのか?」

レーダーに反応がなく、姿も見えない。

『僕はここですよ!』

背後から反応が唐突に現れ、真っ黒に塗装されたブリッツがグレイプニールを射出する。

「反応が遅れた!」

グレイプニールはドレイクハウリングの銃身部分を掴み、そのまま引き寄せられる。

「くっ!」

咄嗟に変形を解除し、応戦できる体制をとる。

だが時既に遅かったか、ゼロ距離まで接近させられ、攻守システムトリケロスの銃身がコックピット部分に突き当たる。

グレイプニールが解かれる。

『この距離ならー！』

ビームが収縮、普通ならここで終わっている。

「あえて言わせてもらおうー！」

ビームが発射される0.5秒ほどの間、それ程の時間があれば十分だった。

「グラハム回避であるとー！」

1秒コンドTRANS-AMを行い、左に回転し回避する。

『え?!』

回転した慣性を活かし、GNサーベルを逆手に構え、攻守システムトリケロスに突き刺す。

『盾を貫通した?!』

そのまま引き抜き、一度距離を取る。

「兄貴のゼロ距離射撃を躲せるようになるまで5年かかったけど…まさか役立つとは

…」

兄貴は昔からゼロ距離射撃癖があり、あの手この手でゼロ距離射撃を行う。

『僕のブリッツが…』

(思った以上に精神ダメージのようだ)

あのスキだらけのガンダムを見ると…ダメだ！

「抱きしめたいなあ！ガンダム！」

自分を抑えきれない我慢ができない男、グラハム・エーカーなら当たり前だろう。

右腕が動かないブリッツに組み付き、デブリに押し当てる。

「まさに…眠り姫だ！」

小学生相手のガンプラに馬乗りになり、動けないようにメインカメラと左腕を押さえ

つけた変態がそのいた。

『ヒッ！』

傍から見たらやはりただの変態だった。

その頃、咲の戦闘は

『いい加減！落ちて！』

「私は！落ちない！」

ビームバスターを連射するクイーンゼイドラは何処か落ち着きのないように見える。

それ程負けたくないのだ。

彼のように勝ち進みたい、ゼハードガレットの様に。

「私はまゆちゃんと話したい！ガンダムの事も！ガンダム以外も！」

両手でドッズサブライフル、ドッズアサルトライフルを連射する。

当たりはするものの、決め手にはならず 擦り傷や凹み程度しか装甲を削れない。

「そして！一緒に楽しくガンプラバトルがしたい！」

『私は負けたくない！負けるなんてゼハートが望む訳ない！』

ゼイドラガンをソードモードに切り替え、AGE-1の胴体に向けて切りかかる。

回避行動を取るAGE-1、だがソードの先端部分が腹部に掠れる。

焦げあとがコックピット下にでき、塗装が少し剥がれる。

「ああ!!」

(おじさん達がやってくれたのに…)

『次は外さない…ガンプラが壊されなくなったら離脱しなさい!』

「なんでそこまで!」

勝ちにこだわるのか、思い返せばフェアじゃない戦いばかり仕掛け、先程の奇襲も作戦と言つてしまえば聞こえはいいがただの後からの闇討ちである。

「私は逃げない…まゆちゃんと仲良くなりたから!」

『私は！仲良しごっこなんか！』

この時、間の悪い男が現れる。

『その辺にしておらおう…』

「龍兄ちゃん？」

ブリッツの後ろ首を掴み、オーバーフラッグカラーのブレイブがこちらへ向かう。

『さつきつから！邪魔しないで！』

『彼女から君が勝ちにこだわる理由を聞いた、正直感服したよ』

『…ごめん、襲われそうになって…聞かれた時断れなくて…』

（龍兄ちゃん？）

『私とて武人だ、少々手荒な真似もする、だが 小池妹！君の理念を突き通すならばそれは1体1の果し合い出なければならぬ！』

『な、何を?!』

『ゼハートガレットは自分の理念、思想、理想を最後まで求め、突き通した男だ！今の君はまるで余裕がなく、ただ勝ちだけを求めている…フランを犠牲にした時のゼハートのようだ』

「……………少し、わかる気がする…」

『…ガンプラバトルは楽しく、お互いにどちらのガンプラが強いか、弱いか、それぞれの

思いが交差する、場所でもある、勝ちだけがすべてではないよ」

彼のようになりたいたいと言う思い、それは痛いほどわかる、そして勝ちたいという気持ちもわかる、ただそれだけではつまらないであろう？

『わ、私は…あの人みたいに…勝ち進みたい…』

『ならば対等に戦う事だ、こんな卑怯な戦いはやめるのだな…』

「私はいつでも相手するよ！だってまゆちゃんやんと戦うの楽しいもん！」

『咲はガン普拉バトルの楽しさに気づいたようで何よりだ』

そうだ、友と競い、争い、全てがガン普拉とファイターで決まる。

だからガン普拉バトルは止められない。

『わかったわ…なら咲！タイムマンよ！』

「うん！」

『今時の子はタイムマンという言葉を通じて使うのか…』